

FUTURE IS HERE

written by HADEYA

1

「貴女は自分がどうやって、ここに来たか覚えていますか？」

唐突に背後から男性に声を掛けられ、振り向いた。私はバーでマルガリータを呑んでいる。そして私は……自分がここまでどうやって来たか思い出せない。つまり、ここは——

「夢の中」

男性が答えた。事実だろう。男性は続けた。

「真相を教えますので、この映像を見て下さい」

男性が手にしている携帯電話の映像を見せた。ディスプレイには〈私〉が映されている。私が私に語り掛ける映像。映像の中の私が告げた。

「驚かないで。貴女は今、ブラックホールの中にいる。間もなく、特異点に到達する。特異点で貴女は自分が何者か知る」

「……何故、私がブラックホールの内部に？」

「そこが争点。何故かは自分で考えて」

映像が途絶えた。その時、誰かが大声を上げた——大変だ！ 飛行機が貿易センタービルに突っ込んだぞ！ 店のマスターが壁に備えられたテレビのチャンネルを変えた。臨時ニュースはショッキングな映像を報道している——セプテンバーイレブンの映像を。

……妙な話だ。セプテンバーイレブンは過去の出来事。一体、今、何が起きているのか。

*

私は考えている。考える私の映像を私は見ている——謎の部屋から。

この部屋の目的は依然、不明。私の名は内田亜美。地球最後の生き残りと思われる。

その日、私は変哲もない日常を過ごしていた。会社に勤務し、事務仕事を熟す。昼食時になり、近場の公園でランチを取る。

……そこから先が思い出せないのだ。その時、何が起きたか知ったのは後での事だった。

その時、私は陽光の下、サンドイッチを食べていた。スレ違う人々を眺めながら。何やらピキピキと音がする。気のせいだろうと思った。違った。音は確かに聴こえていた。ピキピキと言うガラスに亀裂が生じるような音……事実、空中に白い亀裂が生じた。瞬く間に亀裂は広がり、サンドイッチを手にポカンと口を開け、間の抜けた表情を浮かべていた。亀裂は一気に視界一杯に広がり……気付くと、私はバーでマルガリータを飲んでいたので。

そうなった理由は他でもない。私の内面世界の崩壊によって、だ。つまり私は死んだのだ。何らかの理由……突然死か何かで。

後に知った事だが、宇宙には〈ビッグリップ〉と言う宇宙の終焉形態があると言う。膨張する宇宙が自らの膨張に耐えられなくなった時、発生する現象のようだ。

私は室内のカメラのスイッチをオンにすると、カメラに向かって話し掛けた。謎の部屋の中——恐らく、宇宙の核となる部屋で。

ディスプレイにはバーでマルガリータを飲む過去の〈私〉が映し出されている。私は過去の私に話し掛けた。

「驚かないで。貴女は今、ブラックホールの中に——」

一方的に私は語り続けた。その時、誰かが大声を上げた——大変だ！ 飛行機が貿易センタービルに突っ込んだぞ！

同時に携帯電話を通じて、こちらの映像を見せていた謎の男性＝因果律が足早にバーを後にした。歩きながら彼は消えて行く。

店内がパニックに陥った。同時に空間が歪んだ。歪んだ空間が過去の私を押し潰そうとする。しかし球体形状の光のバリアが守っており、何とか過去の私は圧迫を逃れている。

バー全体が球体に飲まれ、宇宙全体が球体に吸い込まれて行く。そのまま球体は過去の私を包み込んだ。内部ではギラギラの光が横一直線に目くるめくフラッシュする。続けて縦に目くるめくフラッシュする。光が収まると、そこにはドアがあった。何て事ない極普通の白いドアが。

ドアを開けようとする過去の私に再び私は語り掛けた。

「まだ気付かない？」

過去の私はキョロキョロしながら尋ねた。

「政府……ですか？」

私は答えた。

「違う。神。私の正体は神。そして神とは他ならぬ貴女の事、内田亜美さん」

「……私は何者ですか？」

「あなたは民。素朴で善良な民。最も正確な時間基準」

「時間基準？」

「時間方程式の事。貴女は選ばれた。つまり宇宙覇者って、事」

同時に宇宙が〈特異点〉に飲み込まれた。何もかも完全に。そのまま特異点は一直線に飛んで行き——

*

声が聴こえる。先程の女性の声。聴き慣れた声……その声は私の声だ。

「初めまして、亜美」

「……未来の私ね？」

「うん。ところで、どこに行くか分かる？」

皆目、見当も付かない。私は問うた。

「どこに行くの？」

「ウンと遠い世界。ウンとウンと遠い世界」

特異点が回転する。遠くに宇宙が見えた。私が育った私の故郷。

「どこに行くか、分かった？」

「ウンと遠い世界。ウンとウンと遠い世界」

その時、脳内を幾多の映像がフラッシュした。出世から今日までのあらゆる映像が。

「分かった、どこに行くか」

今、私が話しているのは未来の自分。未来の自分と私の声が徐々に一体化して行く。

「私はドンドン〈私〉になって行く。私はドンドン消え、現れて行く。私が目指すのは——」

理解した。何もかも。向かう先は——

可能性の未来。

突如、特異点の内部に大量のモニターが出現した。壁一面がモニターに覆い尽くされている——百人称。

一つのディスプレイにタッチした。目の前に光の壁が現れ、壁の向こうにディスプレイの世界が広がっていた。視界の片隅に浮かぶ小さな球体に触れると再び光の壁が現れ、モニタールームへ舞い戻った。

「凄い……」

ディスプレイには様々な私が映し出されている。笑っている私、泣いている私、黄昏ている私。可能性の選択肢は無限に存在する。

パラレル・ユニバース——そこに私は迷い込んだのだ。宇宙終焉と共に。

私は一つのディスプレイを具現化した。それこそが私の願いだった。

私は花屋を営んでいる。主人と共に。緑に囲まれ、元気一杯、汗を流し。

笑顔で接客し、真心を込めて挨拶する。そんな私を見て、主人は言った——愛してる、と。私も同じ台詞を伝え

……

私には見える——幾多の可能性が。数え切れない程の人生の選択肢。その中から一つの未来を私は選ぶ。私を選んだ選択は〈ロマン〉と言う選択だった。

*

モニタールームに舞い戻った。

モニターに……無限の可能性に囲まれ、今日も私は至福を感じている。

何故、私が選ばれたかは自分にも分からない。きっと宇宙なりの理由があるのだろう。これだけは確か、だ。今、私には夢がある。希望があり、自己実現へ向けた弛まぬ努力がある。

誰も見ていない宇宙の片隅に私は暮らしている。無数のディスプレイと共に。

私の名は内田亜美。日本人。地球最後の生き残り。宇宙最後かも知れないが、それは私にも分からない。今日も私は汗水を流す。自己実現に向け、未来へ飛び込む。

私が感じるのは充実感。それに続く、エクスタシー。

もし私が神であるなら、私は皆にこう言いたい——あなたの夢を諦めないで、力の限り、人生を謳歌して、と。神は至る所に存在し、あなたの全てを見ているのだから。ガンバ！（ア）

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872